

## 「日本・沖縄」という空間<sup>1</sup>

### —「反復帰」論における日本側知識人の影響—

小 松 寛（早稲田大学社会科学総合学院助手）

#### はじめに

沖縄の日本復帰が現実味を帯び始めた1960年代後半、「反復帰」論<sup>2</sup>といわれる議論が登場した。新聞記者である新川明、川満信一、琉球大学教授である岡本恵徳らがその論者として知られている。彼らの主張は単に日本への復帰に反対というだけではなく、沖縄の独自性を基盤としながら、反国家・反権力を志向する思想的営為であった。彼らの主張は沖縄の日本復帰でもなく、沖縄の独立でもない。彼らが訴えたこととは国家を否定し国家を超えることにあった。

「反復帰」論者による国家を超える試みとして提案されたものとして、川満信一による「琉球共和社会憲法C私（試）案」<sup>3</sup>がある。ここで謳われた社会とは、この憲法の賛同するひとは誰でも、国籍を問わず、その社会の一員になれるというものであった。これは「反復帰」論者による政治制度の提案とも解釈できるが、その実現性には疑問が残る。例えば、財政については納税の義務はなく、「財政は従来为国家が発想しえないような方法を創造しなくてはならない」とされている。説得力を持つ政体の提案ができなかったところに「反復帰」論の限界があった<sup>4</sup>。

当時その主張は十分に理解されなかったが、

1990年以降、国民国家論などが盛んになるにつれて、「反復帰」論は積極的に評価されるようになる<sup>5</sup>。また、2008年には「反復帰」論を中心テーマとして取り上げた単行本『反復帰と反国家』が出版された<sup>6</sup>。

「反復帰」論における日本側知識人の影響を検討する必要性についてはこれまでも指摘されている。例えば、藤澤健一は新川の「反復帰」論に影響を与えた3冊として、島尾敏雄『離島の幸福・離島の不幸』、森秀人『甘藷伐採期の思想—組織なき前衛たち』、大沢正道『反国家と自由の思想』を取り上げ、その意義を今日的視点から問い直す必要性を訴えている<sup>7</sup>。また、ヤポネシア論と岡本恵徳の思想の関係性について浜川仁は批判的に検討している<sup>8</sup>。しかし、未だその研究は端緒に終わったばかりで十分に進められているとは言えない。

本論では「反復帰」論者の中でも代表格と目されている新川を中心に切りあげ、彼の論考における日本側知識人の影響に焦点を当てる。ここでいう日本側知識人とは、その出身地や血筋ではなく（それらも大きな要素ではあるが）その議論の結論部分が主に日本への批判や提言となっている人々を指す。換言すれば日本を論じるために沖縄に言及した知識人たちである。

---

#### キーワード：

日本復帰、ヤポネシア論、アナキズム、ナショナリズム、沖縄独立論

新川の著作を一瞥すると、島尾敏雄、谷川健一、吉本隆明、大江健三郎の名前をすぐに見つけることができる。今回は特にその中でも強く影響を与えたと思われる島尾敏雄と、島尾が提唱したヤポネシア論について論じる。すなわち、日本国の相対化を図ったといわれるヤポネシア論が、「反復帰」論ではどのように受容されたかを言説分析を通じて検討することが本論の目的のひとつである。その意味で、本論は「空間を相対化する試み」が、認識の上で、言い換えればアイデンティティからどのように行われたのかを検討するものである<sup>9</sup>。

「反復帰」論は日本という国家への再編入に際して、沖縄と国家との関係性について、同時代になされた良質な議論である。また、日本側においても復帰を目前にした沖縄を日本の中でどのように位置づけるべきかという問いに対する答えを模索した時期とも重なる。このような議論に対して強い影響を与えたのが、ヤポネシア論だったのである。ヤポネシア論は1960年代の初めから沖縄と日本との関係について、文化論の視点から取り組んできた。

本来であれば新川以外にも岡本や川満によるヤポネシア論の受容とその比較、考察しなくてはならないが、紙数の関係もあり本論では扱わない。しかし、本論に入る前にひとつだけ議論を紹介しておく。島尾と新川、岡本、川満による座談会<sup>10</sup>において、新川と川満はヤポネシア論の意義について議論している。ヤポネシア論はあくまで相対化のための視点であるという新川と、同時に新たな文化の創造もなされなくてはならないという川満の議論はすれ違う。その背景には多良間島出身の川満には確固たる共同体の記憶があり、その言葉（方言）を表現する道標としてヤポネシア論があった。しかし幼少期に沖縄島から石垣島に移転した新川にとっては、川満のような確固たる共同体がない。それゆえに、ヤポネシア論は画一的日本を相対化する視点として受容され、文化創造の

指針にはなってはいなかった。ここに「反復帰」論者間の違いが垣間見える。

また、本論では新川の論考に大きく影響を与えたと思われるもうひとつの議論、アナキズムについても考察する。そこで「反復帰」論の大きな特徴である「ネーションに根ざしながらステイトを否定する」という主張がどのように形成されていたのかを見ていく。

最後に、まとめとして「日本・沖縄」という空間認識、そして北東アジア認識までを射程にいれながら議論を行いたい。沖縄は太平洋の要石として、朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争、イラク戦争と常に戦争の最前線にあった。さらには米軍兵による事件は後を絶たない。これを目取真俊は「戦後ゼロ年」と表現する<sup>11</sup>。北東アジア地域には冷戦構造がいまだ存続し、緊張が解けない。それゆえに、北東アジアにおいて平和を築くための学知の蓄積が必要とされているのであれば、その辺境である沖縄<sup>12</sup>の経験、すなわち日本へ再び包摂されるという1972年の日本復帰についてなされた、国家とネーションを巡る議論は北東アジアという枠組みを考える上でも決して無意味ではないであろう。

## 1. 「反復帰」論とは

### （1）誕生の背景

沖縄は、日本の国際社会への復帰をもたらしたサンフランシスコ講和条約によって、日本から切り離され、米軍の統治下に置かれることが明確になった。このような流れを受け、1951年には、沖縄社会大衆党（社大党）、沖縄人民党（1973年に日本共産党に合流）らが組織した日本復帰促進期成会が結成された。さらに社大党の青年部を中心とした日本復帰促進青年同志会とともに署名活動を展開し、当時の有権者の72.1%にあたる19万9000人の署名を集めた<sup>13</sup>。

沖縄の日本復帰が実際の政治課題となるのは佐藤栄作内閣が発足してからである。67年の佐藤・

ジョンソン共同声明によって米国による沖縄支配から日本への返還が公式に確認され、69年の佐藤・ニクソンによる日米共同宣言で沖縄の「核抜き、本土並み、72年返還」が発表された。アメリカはベトナム戦争の行き詰まりに直面し、沖縄支配よりも在沖米軍基地の確保に重点を置いていた。日本も沖縄返還を悲願としながらも、必ずしも冷戦構造下にある北東アジアからの米軍の撤退を望んでいたわけではなかった。在沖米軍は残すという、両者の思惑が一致した結果としての沖縄返還であった<sup>14</sup>。

一方、1950年代半ばの米軍による強制的土地接収を契機として「島ぐるみ闘争」と呼ばれた沖縄の民衆運動は高まり、その後の復帰運動へと発展していく。復帰運動の大きな目的の1つとして、戦争反対・平和の要求があった。沖縄返還に言及した67年の佐藤・ジョンソン共同声明では、日米安保および在沖米軍基地の重要性も確認されていた。沖縄県祖国復帰協議会（復帰協）は、その声明に強く抗議し、基地の撤去なくして復帰はないという方針を明確に打ち出す。69年の佐藤・ニクソンによる日米共同声明で謳われた「核抜き、本土並み、72年返還」も実質的内容は核つきのみならず自衛隊配備による軍拡であるとして、復帰協は抗議声明および抗議集会を行っている<sup>15</sup>。

このように、期待された復帰と現実の復帰の差異があらわになってきた時期に現れたのが「反復帰」論である。そもそも「反復帰」論という言葉が初めてメディアで用いられたのは、1970年『新沖縄文学』18号の「特集『反復帰』論」および19号の「特集 続・反復帰論」である<sup>16</sup>。なお、18号の執筆者は知念栄喜、大城立裕、珊瑚太郎（牧港篤三）、新川明、仲宗根勇であり、19号の執筆者は大江健三郎、池沢聡（岡本恵徳）、比屋根照夫、谷川健一であった。

## （２）「反復帰」論の目的

新川にとって日本復帰とは、「日米の権力者に

よって設けられた」「不条理なルール」であった<sup>17</sup>。そして復帰運動は日本国憲法の持つ平和主義というユートピアへの幻想から始まっており、日本に復帰すればすべてがよくなり「とにかく日本に復帰すれば憲法によって人権は守られ、生活は保障される。すべてはよくなるのだ」という幻想を沖縄の人々が抱いているとした。すなわち、復帰運動とはその虚妄から出発しており、素朴な日本ナショナリズムを煽り立てるものであった<sup>18</sup>。さらにそれは基地の永続化を図る日米両政府の意図に一致するばかりか、補完する作用も持っていた、と指摘した<sup>19</sup>。

このような沖縄の日本志向は、新川によれば明治以来沖縄人の精神史（思想史）の内面に綿々と続く「負荷」であり、日本という国家へ組み込まれることは、沖縄の個性を没することに他ならなかった<sup>20</sup>。

「反復帰」論の目的とは、単に復帰に反対するのみではない。沖縄人が日本人に対して持つとされる「異質感」、もしくは自らを「異族」として認識することが求められる。この歴史的・地理的経験から由来する「異質感」は、科学的に沖縄人と日本人の間に違いがあるかどうかは問題ではなく、本人が国家もしくは日本をどのように意識するかのみが問題となる<sup>21</sup>。自らを「異質感」「異族」として認識することによって、国家＝国民への同一化を拒み、国家としての日本を相対化し否定することができる、というものであった。その意味で、「反復帰」論とは国家への合一化をあくまで拒否し続ける精神志向、と位置づけていた<sup>22</sup>。

これらを端的に表現すれば、ネイションに根ざしてステイトを否定することにその目的があったといえるだろう。このことは他の「反復帰」論者にも共通する。前述の通り、新川は個人の持つ日本への「異質感」もしくは「異族」としての沖縄人に根ざしながら国家へ抵抗すべきであると説いた。岡本は個人と共同体の関係性に着目し、個人を中心とした共同体を抵抗の拠点に据えた。川満

は言語（方言）が共有されている村落共同体から、国家としての日本へ抵抗すべきであると説いた<sup>23</sup>。

### （３）沖縄独立論との差異

1970 年前後に同じく沖縄の日本復帰にたいして反対していたグループとして、後に琉球独立党に合流する「沖縄人の沖縄を作る会」が存在する。そのメンバーとしては、当間重剛元琉球政府主席や元琉球政府文化財保護委員長であった山里永吉らが知られている。「反復帰」論とほぼ同時期に山里永吉らによって提唱されていたこの「沖縄独立論」と、「反復帰」論は明確に区別されるものであり<sup>24</sup>、その理由として2点指摘できる。

1 点目として「沖縄独立論」は沖縄の保守派、財界人によって支持され、アメリカ占領下における既得権益の守旧が主な目的であった点である。1969 年 10 月 10 日、沖縄タイムスに掲載された「沖縄人の沖縄を作る会」結成・総決起大会の広告によれば、そのメンバーとして、煙草会社や飲料メーカーの社長の名前が記されている。また、設立主旨では、現在の沖縄経済は有史以来の繁栄を遂げていると言い、現在の政治経済体制は 20 年後に沖縄に「楽土」を建設できる、という楽観的にすぎる現状認識がある<sup>25</sup>。

2 点目は琉球王国への評価である。山里はその著書『沖縄人の沖縄—日本は祖国に非ず—』において沖縄が独立すべき理由として、琉球王国の歴史がいかに誇り高きものかを何度も繰り返す<sup>26</sup>。これに対して日本に対する「異質感」が沖縄人を規定するのと考えた新川は、琉球王国の歴史を積極的に評価したことはない。新川はまた、山里らによる運動を「退行的な独立論発想の琉球ナショナリズム」とし厳しく批判している<sup>27</sup>。

以上、「反復帰」論が誕生した背景とその内容に関する特徴を駆け足ながら概観した。次章では、この「反復帰」論に影響を与えたとされているヤポネシア論について見ていきたい。

## 2. ヤポネシア論とは

### （１）ヤポネシア論の意図

島尾敏雄は 1917 年、福島出身の両親の元に、横浜で生まれた。28 歳のときに終戦を迎えたが、8 月 13 日に特攻命令を受けていた。翌年、奄美出身の大平ミホと結婚し、38 歳で奄美大島に転居している。そして 1958 年、41 歳の時に鹿児島県立図書館奄美分館長に就任した。

「ヤポネシア」という言葉は島尾の造語である。初出は 1961 年『世界教養全集』21 巻の月報 15 号に掲載された「ヤポネシアの根っこ」だとされている<sup>28</sup>。奄美での経験を基に意図されていたのは、大陸に従属する日本ではなく、南島の島々のつらなりとして日本を捉えることであった。

もちろん根深くささった大陸からの刺激と貸与を無視しては日本についてどんなことも考えにくいにちがいないが、でもその方ばかりを向いていたのでは、いつもどんづまりの吹きだまりの実験場所という受身の感じからぬけられない思いがしはじめたことだ。そのこととからみ合って、地図帳の上の日本はいつも大陸の末端のところではかとらえられないようだ。もとは大陸に附属していたが残念なことに、あいだの陸地が陥没してほんのわずかばかり離れてしまったとでもいいたげに！

（中略）

ひとつの試みは地図帳の中の日本の位置をそれらの島々の主題にして調節してみることだ。おそらくは三つの弓なりの花かざりで組み合わせられたヤポネシアのすがたがはっきりあらわれてくるだろう。（中略）そして日本の、南太平洋の島々のひとつのグループとしての面を考えることは、かたくしこってしまった肩のぐりぐりをもみほぐしてくれるにちがいない<sup>29</sup>。

「三つの弓なりの花かざり」とは南西諸島、日本列島、千島列島を指しているが、ここで着目す

べきは、まるで地図をひっくり返すかのような文学者らしいダイナミックな認識の転換を行っている点である。これにより、中国による日本への圧倒的な存在感もしくは影響力を相対化しようとしている。

また、60年代後半のヤポネシア論に関する論稿では、日本は「東北」「中央日本」「琉球弧」の三つの部分で構成されている。

私は近ごろ、自分の国である日本という国を、三つの部分から成立しているのではないかと思えて仕方がない。それは北の方から言うと、東北と中央日本と琉球弧の三つの部分、なおかつつづめて言うと、日本の歴史の展開とそのとらえられ方は、おおよそ中央日本だけを目のなかに据え置くことによって、そのことに疑いを持たず、それを基盤としておこなわれて来たのではなかったか<sup>30</sup>。

ここでは日本の性質を単純なものではなく、「東北」、「中央日本」、「琉球弧」に色分けすることにより日本の複雑性を描き出そうとしている。島尾によれば、その複雑性、つまり「東北」と「琉球弧」を隠しているのが「中央日本」なのである。そこには、東北出身の両親という血筋と奄美での経験が反映されているのは想像に難くない。

さらには、奄美の本土に対するコンプレックスを払拭し、日本に置いて正当な位置づけを行い、「励ましを送る」ことが、ヤポネシア論を唱える動機のひとつであった。それゆえに沖縄にて多くの人々の共感を呼び、受容された<sup>31</sup>。さらに「中央」と「東北」「琉球弧」の支配―被支配構造への認識は1970年ごろに顕著になったと岡本は指摘した<sup>32</sup>。

以上がヤポネシア論の概要である。次節では、ヤポネシア論を日本側知識人、特に新川の論稿に引用されている論者がどのように受容してきたかを整理していく。

## （２）ヤポネシア論の展開と批判

沖縄の日本復帰が現実味を帯びた1960年代後半、日本側知識人は沖縄が日本に再び組み込まれるという事態に際して、その意義を探るべく論稿を発表した。その際に援用されたのは、比較的早い段階から日本と琉球弧の關係に言及していた島尾であった。

1969年、吉本隆明は「異族の論理」を発表する。論の冒頭、吉本はいわゆる沖縄返還問題の本を読みあさるが、そこに興味はわかず、そこで島尾敏雄の文章が懐かしくなり、沖縄問題とは日本人の起源、日本文化の起源とはなにか、そして琉球・沖縄の日本における占める場所を探る方が現状に対して切実である、と述べる<sup>33</sup>。そして沖縄の特性を縄文的であると規定し、それにより天皇制によって成立してきた日本の歴史を相対化できると論じた。

琉球・沖縄の存在理由を、弥生式文化の成立以前の縄文的、あるいはそれ以前の古層をあらゆる意味で保存しているというところにもとめたいとかがえてきた。そしてこれが可能なことが立証されれば、弥生式文化＝稲作農耕社会＝その支配者としての天皇（制）勢力＝その支配する＜国家＞としての統一部族国家、といった本土の天皇制国家の優位性を誇示するのに役立ってきた連鎖的な等式を、寸断することができるとみなしてきたのである。いうまでもなく、このことは弥生式文化の成立期から古墳時代にかけて、統一的な部族国家を成立させた大和王権を中心とした本土の歴史を、琉球・沖縄の存在の重みによって相対化することを意味している。（中略）琉球・沖縄は現状のままでも地獄、本土復帰しても、米軍基地をとりはらっても、地獄にきまっている。ただ、本土の弥生式以後の国家の歴史的な根拠を、みずからの存在理由によって根底から覆えしえたとき、はじめていくばくかの曙光が琉球・沖縄をおとずれるにすぎない<sup>34</sup>。

上記の文章からわかるように、吉本にとって沖縄の日本における存在理由は、縄文的文化の遺制を持ち、「異族」として日本に存在し、弥生式文化を端緒とする天皇制を相対化するとき初めて満たされるのである。少なくとも吉本にとっては沖縄における施政権や米軍基地の存在は大した問題ではなかった。

1970年、谷川健一も「＜ヤポネシア＞とは何か」において、これまでの日本を相対化する視点としてヤポネシアをとりあげた。単一的で粗雑な日本ではなく、複合的で精密なヤポネシアを想定し、支配者によって形成された直線的な日本の歴史を解きほぐす必要性を訴えた。

ヤポネシアは、日本脱出も日本埋没をも拒否する第三の道として登場する。日本にあってしかもインターナショナルな視点をとることが可能なのは、外国直輸入の思想を手段とすることによってではない。ナショナルなものの中にナショナリズムを破裂させる因子を発見することである。それはどうして可能か。日本列島社会に対する認識を、同質均等の歴史空間である日本から、異質不均等の歴史空間であるヤポネシアへと転換させることによって、つまり「日本」をヤポネシア化することで、それは可能なのだ<sup>35</sup>。

谷川の言う「インターナショナルな視点」を日本内において見出そうとするとき、その足がかりとなったのがヤポネシア論であると捉えられている。また、本論稿はヤポネシア論が広く知られるようになった契機の一つでもあった。

しかし、谷川は1987年、島尾敏雄追悼特集において、ヤポネシア論に対し批判を加える。それは、「ヤポネシアに無権力社会の幻を夢みる私の志向」を明らかにした上で、「日本列島の中央部を占める倭人の権力社会を抜きにした場合のヤポネシア論は、歴史社会の形成の動因を考慮に入れないことによって、静的なモデルとして甘んじな

ければならない」<sup>36</sup> というものであった。

以上、吉本と谷川についてヤポネシア論がどのように受け入れられたかを見てきた。両者に共通することは、現実の日本社会を相対化する梃子の支点として琉球弧を捉える視点をヤポネシア論から取り入れたこと、そして天皇制や権力といった国家論に引き付けて議論されていたことである。

また、ヤポネシア論に直接言及されてはいないが、大江健三郎についても同様の傾向が見て取れる。『沖縄ノート』では「沖縄の先駆的な知識人についても…決して日本の『中華思想』的感覚にのみこまれず、天皇制国家のピラミッドを支える中央指向性にたいしても、したたかな相対主義の自由を放棄することのなかった面だましいが実在することを、僕は見出さぬわけにゆかなかった」とある<sup>37</sup>。やはりここでも沖縄を基点として日本を相対化しようとする試みが見られる。

それでは、ヤポネシア論とその周辺の議論はどのように新川の「反復帰」に影響を与えたのだろうか。

### 3. 「反復帰」論へのヤポネシア論の影響

#### (1) 「反復帰」論におけるヤポネシア論

新川が1970年に発表した論稿において、島尾敏雄とヤポネシア論に関して次のように記している。「たとえば『ヤポネシア』とそれにかかわる『琉球弧』についてつぎのように（「ヤポネシアの根っこ」＝引用者注）島尾が書くのを読むとき、わたしは深い衝動にからだの内側から強くつき動かされてしまうのをどうすることもできない」<sup>38</sup>。

また、新川は2000年に刊行された私史的評論集『沖縄 統合と反逆』で自身の「反復帰」論における「ヤポネシア」論の影響を以下のように回顧している。

私のいわゆる「反復帰」論は、このあとさらに島尾の「ヤポネシア」論の「衝迫」によって結実に向かうことになる。ここに至る道程で、60年

代における島尾との「出会い」と、以後持続的に発信される「黙示」こそがその基盤をつくる最大の力となったことは動し難い。それゆえに、私の「反復帰」の母体は、島尾敏雄である、と言い切ってもよいのである（傍点筆者）<sup>39</sup>。

実体的な国家としての「日本」と自らの生存域との緊張した関係性の中で、切迫した状況に立たされて危機意識をつのらせている人にとっての「ヤポネシア」論は、新しい国家論あるいは国家観を触発させる起爆剤となり、そこから「独立」論を含む多様な議論を生み出していくことになる<sup>40</sup>。

また、新川は島尾による著作のうち、特に『「沖縄」の意味するもの』（『離島の幸福・離島の不幸』1960年刊行に所収）、「滑稽な場所から」および「ヤポネシアの根っこ」（共に『非超現実主義的な超現実主義の覚書』1963年刊行に所収）の3つをとりあげ、その意義を以下のように述べている。

『「沖縄」の意味するもの』では、沖縄の持つ文化的な良さは歴史上、日本によって隠されており、その苦難の歴史を持つ南島の人々こそ、日本の怠慢に匕首をつきつける権利があるという内容である。その意義を新川は「日本という国と沖縄との関係性を考えるに際しての、私（たち）に欠けている視点を示唆するもの」であるとした<sup>41</sup>。「滑稽な場所から」は日本共産党系の雑誌である『新日本文学』に作品を載せるよう頼まれた島尾が社会主義リアリズムという枠組みの中で書かざるを得ないことに対する違和感を表明したものである。新川にとっては「社会主義のイデオロギーに立った文学活動をしていた自らの思想の硬さを、大阪経験の中でほぐしつつあった私に、（中略）自己変革をうながす『黙示』であった」という<sup>42</sup>。

そして「ヤポネシアの根っこ」については「島尾の『ヤポネシア論』がそれぞれの問題意識に添ってその思考を刺激し、想像力を喚起する多面的で柔軟な概念であることを開示する」と新川は位置づけている<sup>43</sup>。

## （2）ヤポネシア論における国家論

ここであげられている3つのエッセイのうち、ヤポネシア論に関するのは『「沖縄」の意味するもの』と「ヤポネシアの根っこ」であり、ヤポネシア論初期の作品である<sup>44</sup>。

新川の「反復帰」論において中核となる論稿『「非国民」の思想と論理』においては、前述の吉本や谷川の論稿も引用されているにも関わらず、島尾への評価が格段に高い。その理由として考えられるのは、吉本や谷川の論稿が日本という国家論を中心に据え、日本を相対化する梃子として琉球・沖縄を捉えているのに対して、島尾のヤポネシア論は国家論、とりわけ権力構造<sup>45</sup>への考察は見られないからである。この傾向は特に1960年代初期に明白である。このことを谷川は権力社会の不在であると言い<sup>46</sup>、岡本はヤポネシア論における「国家論の欠如」と述べている<sup>47</sup>。

ヤポネシア論と国家論の関係については、現在でも多様な解釈がなされている。田仲康博はヤポネシアという文学的な言葉は時と場合によって政治的な概念となって受けられると指摘する。国境を持つ国民国家という概念を解きほぐすヤポネシア論自体は「反」国家論ではなく「非」国家論である、というのである<sup>48</sup>。

さらに、田仲は島尾が沖縄をユートピアとして捉えていた事実を踏まえつつ、以下のように語る。「（ヤポネシア論によって）自らを語る言葉を与えられたと錯覚した彼らを理解するためには、同化と異化の間を揺れる時代の振り子が復帰前後の沖縄では同化の方法に大きく振れていた状況を理解しなければならない」<sup>49</sup>。

大陸文化の影響を強く受けた、弥生文化中心の日本を、「琉球弧」「東北」「中央」という複合的なヤポネシアとして読み替え、琉球・沖縄の人々のコンプレックスの払拭を意図された島尾のヤポネシア論は、「反復帰」論においては沖縄の独自性を打ち出し、日本からの自立を主張するための理論的支えとなった。それは、吉本や谷川らにく

らべて、島尾のヤポネシア論が「国家論」の色合いが希薄なため可能となった。

以上が論稿それ自体から読み取れる論理的展開であるが、新川と島尾、谷川それぞれとの個人的かかわり方の違いからもヤポネシア論が重用されている可能性も指摘しておく。新川は島尾とは奄美分館長時代から死去直前まで交流があった<sup>50</sup>。それに対し谷川からは、「反復帰」論は実際に沖縄が日本に復帰した場合にはなんら意味を持たなくなる、と指摘され「反復帰」論を単なる政治的状況論として捉えられたことに落胆した、と語っている<sup>51</sup>。

ここまで見てきたように、「非」国家論であるヤポネシア論を、「反復帰」論者は国家論として読み取り、さらにヤポネシア論に国家論的影響を与えた。そのことはヤポネシア論によって日本への包摂を志向した奄美での受容と比較した場合、顕著となる<sup>52</sup>。国家論への読み替えは「国家としての日本」に抵抗するために新川にとって必要な作業であった。

「国家としての日本」への抵抗に関しては、新川の八重山経験にも着目しなくてはならない。新川は1964年、労働組合運動が原因となり八重山支局勤務となる。33歳のときであった。8歳から15歳までをすごした八重山で新川は島々をまわり、その歴史と人々の生活を克明に記したルポルタージュを『沖縄タイムス』紙上に連載する。約1年間で44回の連載は1978年に『新南島風土記』<sup>53</sup>としてまとめられた。その「あとがき」には東京中心に日本を考えることや那覇を中心に沖縄を考えるのではなく、島々に生きる人々の生きざまを捉え共有することこそが重要であり、その考え方の素地は島尾との出会いによって生まれたと回想している<sup>54</sup>。

新川の論考において八重山の経験が重要な役割を果たしていることが分かるが、ここで留意すべきは、新川の「反復帰」論で表象される沖縄は、首里と八重山の対立構造、もしくは重層的な沖縄

像というよりは、多様ではない画一的な沖縄が屹立していることである。これは国家という大きな力に抵抗するために、内部構造を捨象し、シンプルで明確な沖縄を提示する必要があったためと考えられる。

## 4. 「反復帰」論とアナキズム

### (1) アナキズムの導入

新川明の「反復帰」論へ思想的影響を与えた議論で、ヤポネシア論とともに重要なものとしてアナキズムがある。新川はアナキズム、とりわけ大沢正道による著書『反国家と自由の思想』（1970年）との出会いを次のように表している。

島尾敏雄との出会いによって最初の目の鱗を削ぎ落とされた私は、その後「ヤポネシア」論の洗礼を受ける中でさらに目を洗われ、最後に残っていた鱗が大沢のこの著作（『反国家と自由の思想』－引用者注）によって洗い流されたと形容すれば、私が「反復帰」＝「反国家」に到達した軌跡をもっとも的確かつ端的にあらわすことになるだろう<sup>55</sup>。

大杉栄全集の編者でもある大沢は本書の中で、1960年代にアナキズムは復活したと述べている。また、今日におけるイデオロギー構築の課題のひとつとして、アナキズムでもなくマルクス主義でもない、まったく新しい理論が必要である、としている<sup>56</sup>。

新川は『反国家と自由の思想』の最後の2ページより、国家の説明として、「たんに被支配者階級を支配し、抑圧するための実体的な政治機構であるにとどまらず「それは実体的な抑圧機構であると同時に、人間の存在全体に意味づけと方向づけを付与する価値体系であり、人間の思考や情緒、行動のすべてを規制する存在様式でさえある」という部分を引用している<sup>57</sup>。そして、個々は国家による強制を受けつつ、さらに個々が補強する

ことによって国家が成り立ち続けることを指摘している<sup>58</sup>。この部分是新川の「反復帰」論における国家認識の核心と言えるところである。

## （２）1960年代のアナキズム論

アナキズムの影響を受けた背景としては、いわゆる既成左派政党への反発として、アナキズムが再び見直されたことがあるであろう。大沢は「左からのトロツキズム、アナキズム、無党無派左翼等々が、『革命的保守主義』（いわゆる既成左翼のこと—引用者注）の保守性に反逆した学生、詩人、文学者らインテリゲンチヤに浸透しつつある」と当時を評している<sup>59</sup>。

また、いわゆる新左翼に批判的な立場の論者も、アナキズムの影響を指摘している。例えば、「新左翼」を自称している団体の思想や行動は基本的にアナキズムの変形ないしは修正にすぎない<sup>60</sup>、といったものや、70年闘争を進める中で重要なことは現代トロツキズム、現代無政府主義ともいべき思想の集団に対する理論闘争である<sup>61</sup>、といった内容である。

新川は「かつて自らを呪縛したマルキシズムも、沖縄人民党＝日本共産党の教条主義に対する反発から疎ましくなり、さりとて反日共系諸党派の思想にも違和感があって同調できない。一種の思想的な飢渴状況にあった私は、『アナキズム思想史』（大沢正道著、現代思想社刊、1962年—引用者注）の著者による前記著作（『反国家と自由の思想』のこと—引用者注）は干天の慈雨のごときものであった」<sup>62</sup>と回顧している。

以上の議論をまとめると、民族性に依拠して国家を否定するという「反復帰」論の特徴は、沖縄の特異性を称賛したヤポネシア論と、国家の否定を志向し続けたアナキズム、60年代に高まりを見せたこの両者に、沖縄帰属議論が媒介となり奇妙な融合を果たした結果の産物、といえるのではないだろうか。ナショナリストでアナキストという思想家として新川は理解されよう<sup>63</sup>。

## おわりに

### ヤポネシア論と北東アジア、「反復帰」論と北東アジア

島尾のヤポネシア論は、大陸と中央日本の強い影響から逃れ、日本を南島と東北という要素から見つめなおし、日本を相対化しようとする試みであった。しかし、ヤポネシアの地図上には、千島列島を取り込んだにも関わらず、アイヌへの言及はほとんどなかった。さらに島尾の幻想する共同体は国家を超えることもなかった、という指摘がある<sup>64</sup>。つまり、日本の相対化を図ったヤポネシア論の範囲は戦後の日本国を大きく超えることはなかった。その背景として、島尾が奄美に移住した翌年に書かれた以下の文章を見てみたい。

しかし私は日本国をのがれることを為し得ない。とすると私たちには同じ国家の中において多彩な要素で混交しぶつかり摩擦し合う興奮を経験することは、遂にできないのだろうか。もちろん私は朝鮮や台湾や南洋群島を考えなかったわけではない。かつてそれらはみのりの少ない私の精神に活力を与えた。しかしそれらと血を通わせることは遂になし得なかったのだ。私の視点は次第に南西諸島にしばられて行った。（中略）

わたしはそこ（南西諸島—引用者注）をかけがえのない大事な場所と思っていたから、敗戦直後アメリカによって為された分離に私の内部はどれほど傷ついたか。やはり日本列島は北方の千島列島と南方の南西諸島によるけん引がなければちぢかまりくぐまった不具者になってしまう。だからその部分が本土から切り離されればそこから血がしたたり貧血して行くことは当然と言わなければならない。

その故に辛うじて奄美列島の部分がもどって来ただけでも体内にぐっと熱い血潮が還流してくるのを感じたのだ<sup>65</sup>。

領土を身体的な比喩を用いて表現することは珍しくないが、このような強烈な描写をどのように考えればよいのだろうか。

この文章については、島尾が胸の痛みを伴って、大東亜共栄圏への夢想とその挫折を明かし、南島への志向は島尾自身の根っこである「異郷」へ抜け出たい、という解釈もある<sup>66</sup>。

しかしここには、かつての大東亜共栄圏の範囲、朝鮮や台湾や南洋群島への憧れがあり、敗戦と同時に南西諸島がアメリカに占領されたことへの痛みがあったことは見逃せない。

島尾は1945年の敗戦、1972年の沖縄の日本復帰という国境の再編に際して、日本を相対化し、多様で複雑な日本を表すという目的のために琉球弧の特色に意味を見出した。こうして生まれたヤポネシア論そのものは、北東アジアまで拡張する要素は持ちえない。

ヤポネシア論は沖縄でもっとも受容された。しかし、ヤポネシア論に触発された議論の1つである「反復帰」論は民族性を高らかに謳いながら国家そのものを否定するという結論をもたらした。また、興味深いことに「反復帰」論は「沖縄」の範囲を明確にしていない。それゆえに「反復帰」論を他のアジア地域までつなげて考えることがで

きる、という捉え方もある。例えば、仲里は「反復帰」論に沖縄とアジアとの共通の深層として、植民地主義の記憶を見出す<sup>67</sup>。このような読み方が可能となるのは、「反復帰」論において「沖縄」が単なる地理的概念として語られなかったからであろう。北東アジアという空間を考えるうえで、このことはひとつの指針として捉えることも可能ではないだろうか。

その際に問題となるのは、「反復帰」論がついには代替的な政治的共同体を提示できなかったことにある。北東アジアを巡る思想の志向性として、民族性にに基づきながら、国家を否定するのではなく国家を超え地域に関与するあり方を求めなくてはならないだろう。

北東アジアに存在するネーションのひとつである沖縄でなされた、民族性に依拠しながら国家の持つ暴力性を看破した思想が持つ意味を考えることは決して無意味ではない。「祖国復帰」「民族の再統一」が声高に訴えられた状況下で生まれた思想は、ナショナリスティックな言論がいまだに散見されるこの地域だからこそ、民族と国家を分けて考え、国家ありきではない議論の方向性を立てる重要性を鮮やかに際立たせる。

- 1 本論文は2008年9月27、28日に開催された北東アジア学会第14回学術研究大会にて行った報告が基となっている。コメンテーターの宮島美香准教授（香川大学）、司会の吉川健治准教授（東洋英和女学院大学）より、大変貴重なコメントを頂いた。ここに謝意を表したい。
- 2 本論では「反復帰」とかぎ括弧を用いて表記する。その理由は「反復帰」がその文字通りに沖縄の日本復帰に反対したのみならず、沖縄と国家の関係を深く考察し、その知的蓄積は今日の沖縄の現状を考える上でも非常に有用であると考えからである。その意味で「反復帰」論とは単純な沖縄帰属議論ではない。
- 3 川満信一「琉球共和社会憲法C私(試)案」『新沖縄文学』48号、沖縄タイムス社、1981年 pp.164～172。
- 4 なお、その思想的意義を積極的に評価しようとしたものとしては、上野千鶴子『生き延びるための思想』岩波書店 2006年 pp.36～37、西川長夫『＜新＞植民地主義論』平凡社 2006年 pp.136～140がある。
- 5 例えば、小熊英二『＜日本人＞の境界』新曜社 1998年 pp.597～626、戸邊秀明「新川明 反国家の兇区」岩崎稔ほか編『戦後思想の名著50』平凡社 2006年 pp.385～396、屋嘉比収「自らの思想を穿つ思想—新川明の『反復帰』論」『前夜』9号 NPO 前夜 2006年 pp.83～91を参照されたい。
- 6 藤澤健一編『反復帰と反国家』社会評論社 2008年。
- 7 藤澤健一他編『沖縄に向き合う・眼差しと方法』社会評論社 2008年 pp.212～213。
- 8 浜川仁「イデオロギーとしてのヤポネシア論—試論—」『沖縄キリスト教学院大学論集』第4号 2008年 pp.13～22。
- 9 空間の相対化については、認識上の問題の他に、実空間の相対化も重要なトピックである。地域研究における地理政治学のスケール概念の導入により実空間の読み換えを試みた論考として柑本英雄「リージョンへの政治地理学的再接近：スケール概念による空間の混沌整理の試み」『北東アジア地域研究』14号 北東アジア学会 2008年 pp.1～20。
- 10 島尾敏雄他「幻の座談会 琉球弧とヤポネシア」『新沖縄文学』71号 沖縄タイムス社 1987年 pp.116～121（座談会自体は1978年に行われた）。
- 11 目取真俊『沖縄「戦後」ゼロ年』NHK出版 2005年 pp.12～17。
- 12 多賀秀敏によれば認識上北東アジアに台湾は含まれない。「北東アジアの国際関係」『北東アジア事典』国際書院 2006年 p.19。
- 13 新崎盛暉『戦後沖縄史』日本評論社 1976年 p.70。なお、この署名活動が行政機関によって行われた点に着目しながら、積極的な日本復帰への意思というよりは、米軍統治による不安・不信の表現として捉えるべきであるという論稿もある。上地聡子「日本『復帰』署名運動の担い手—行政機構と沖縄青年連合会—」『沖

- 縄文化』第40巻2号 沖縄文化協会 2006年6月 特に pp.123～124。
- 14 新崎 前掲書 pp.291～299。
- 15 我部政男『近代日本と沖縄』三一書房 1981年 pp.191～195。
- 16 「反復帰」という直接の文言こそ登場しないものの、新川明「沖縄の思想的課題とは何か」沖縄研究会編『物呉ゆすど…沖縄解放への視角』田畑書房 1970年 pp.27～33や新川明「非国民の思想と論理」谷川健一編『沖縄の思想』木耳社 1970年 pp.5～72などが『新沖縄文学』による特集以前に「反復帰」論と連なる論考と考えられる。
- 17 新川明『新版 反国家の兇区』社会評論社 1996年 p.303。なお、初版は1971年に現代評論社から出版されている。
- 18 新川明「非国民の思想と論理」谷川健一編『沖縄の思想』木耳社 1970年 p.10。
- 19 同上 p.12。
- 20 新川も当初は沖縄の日本復帰を支持していた。彼の日本への失望には社会的動向だけではなく、その個人的な日本での経験も大きく影響している。新川明・小熊英二「沖縄現代史と＜反復帰論＞」（インタビュー）『Inter Communication』47号 NTT出版 2004年 p.133。
- 21 新川明 前掲書（注番号17） pp.10～11。
- 22 新川明 前掲書（注番号17） pp.304～305。
- 23 新川、岡本、川満による論考の比較は拙稿『「反復帰」論の社会単位—抵抗する沖縄の基本構造—』『琉球・沖縄研究』第2号 早稲田大学琉球・沖縄研究所 2008年 pp.57～73にて行っている。本稿で詳細に紹介する紙幅はないが、下記は結論部分の表である。この表は彼らが想定する沖縄の最小単位とその行動を規定する規範、そして抵抗の対象を抽出したものである。

表：抵抗する「沖縄」の構造とその抵抗対象

|    | 抵抗の拠点となる「沖縄」 |                 | 主な抵抗対象    |
|----|--------------|-----------------|-----------|
|    | 最小単位         | 規範              |           |
| 新川 | 個人           | 異質性（異族）に根付く自己認識 | 国家<br>天皇制 |
| 岡本 | 個人を中心とした共同体  | 共同体的意識          | 国家<br>天皇制 |
| 川満 | 村落共同体        | 「共生」への志向        | 国家<br>天皇制 |

- 24 「沖縄独立論」と「反復帰」論、両者とも復帰に反対していたという事実から、共に見られる「沖縄ナショナリズム」的側面を抽出し、沖縄アイデンティティを解明しようとする研究もある。林泉忠「第3章『祖国復帰』と『反復帰』」「辺境東アジア」のアイデンティティ・ポリティックス』明石書店 2005年、および「アイデンティティの十字路—『祖国復帰』と『反復帰』のイデオロギー的性格を中心に」琉球大学法文学部『政策科学・国際関係論集』第7号 2005年 pp.35～66。なお、後者の論文において林は「反復帰」論は運動として理解することが適切であるとしている。しかし、筆者は「反復帰」論は運動ではなく思想として理解す

- るべきと考える。その理由とは、運動として捉えた場合、社会動員の規模において復帰運動とは比べ物にならず、その評価が相対的に低くならざるを得ないこと、さらに林は「反復帰」論と独立論を「思想的ビジョンを示す側面と政治的目標の具現化を訴える側面との柔軟な補完関係にある」(p.54) というが、本論の第1章第3節で述べている通り両者の主張の立脚点および手法はまったく異なっているからである。
- 25 沖縄人の沖縄を作る会「沖縄は沖縄人のものだ！われわれは日本復帰を急がない」『沖縄タイムス』1969年10月10日。
- 26 山里永吉『沖縄人の沖縄—日本は祖国に非ず—』沖縄時報社 1969年。
- 27 新川明『沖縄 統合と反逆』筑摩書房 2000年 p.68。
- 28 岡本恵徳『「ヤポネシア論」の輪郭』沖縄タイムス社 1990年 p.11。
- 29 島尾敏雄「ヤポネシアの根っこ」『世界教養全集第21巻月報15号』平凡社 1961年 pp.4～6。
- 30 島尾敏雄「私にとって沖縄とはなにか」『島尾敏雄全集』第17巻 晶文社 1983年 p.167(初出は『琉球新報』1969年2月12日)。
- 31 前掲書 岡本 pp.12～13。
- 32 前掲書 岡本 pp.146～147。
- 33 吉本隆明『異族の論理』『吉本隆明全著作集(続)』第10巻 勁草書房 1978年 p.190(初出は1969年、『文芸』第8巻第12号 河出書房新社)。
- 34 同上 pp.201～202。
- 35 谷川健一「〈ヤポネシア〉とは何か」島尾敏雄編『ヤポネシア序説』創樹社 1977年 p.62(初出は『日本読書新聞』1970年1月1日)。
- 36 谷川健一「鎮魂と贖罪」『文学界』1月号 文藝春秋 1987年 pp.304～305。
- 37 大江健三郎『沖縄ノート』岩波書店 1970年 p.220。なお、新川は大江との間には長年にわたる親交があるが、その評価については「沖縄なんて鏡でもなんでもないわけだし、沖縄をそのようにみられるのは何かこそばゆいみたいな感じが強かった」と語っている。新川明 前掲書(注番号20) p.133。
- 38 新川 前掲論文(注番号18) p.41。
- 39 新川 前掲書(注番号27) p.99。
- 40 新川 前掲書(注番号27) p.117。
- 41 新川 前掲書(注番号27) p.86。
- 42 新川 前掲書(注番号27) p.98。
- 43 新川 前掲書(注番号27) p.116。
- 44 新川自身も、大学生時代に創刊のメンバーであった『琉大文学』において社会主義リアリズムに傾倒し、『新日本文学』1956年の7月号および11月号に沖縄からの土地闘争に関する現地レポートを掲載している。しかし、復帰へ懐疑的になると同時に、復帰を推進していく共産党らと対立していくことになっていく。「滑稽な場所」で明らかにされた社会主義リアリズムへの疑問は、当時の革新勢力と対立を生む契機の1つとして理

- 解できる。詳しくは拙稿「沖縄における『反復帰』論の淵源—『琉大文学』を中心に—」『ソシオサイエンス』第14号 早稲田大学社会科学部研究科 2008年 pp.69～71。
- 45 政治理論における権力概念は、ミシェル・フーコーの登場によって大きく変化する。フーコー以前の権力とは「何々するな」と人々の行動を規制する力と理解されてきた。しかし、フーコーによる「規律」概念により「何々せよ」と人々の行動を規定することが権力の最大の作用であると理解されるようになったのは周知の通りである。しかし、フーコーは権力を国家に集中しているものではなく、社会における諸関係のいたるところに存在していると説く。筆者はフーコーによる規律を重視する権力観が肝要であると考え。しかし、「反復帰」論研究においてはとりわけ国家による権力について着目せざるを得ない。フーコーの政治理論上のインパクトについては杉田敦『権力の系譜学』岩波書店 1992年、特に「第2章 ミシェル・フーコーと政治理論」に詳しい。
- 46 前掲 谷川(注番号36) p.305。
- 47 前掲書 岡本 p.185。
- 48 田仲康博「他者の眼差し」『ユリイカ』第30巻第10号 青土社 1998年 p.214。
- 49 同上 p.216。
- 50 新川明「島尾敏雄の若干の回想」奄美・島尾敏雄研究会編『追悼 島尾敏雄』南方新社 2005年 p.27。
- 51 新川明(インタビュー)「反復帰論と同化批判—植民地下の精神革命として」『前夜』9号 NPO 前夜 2006年 p.56。
- 52 前利潔「〈無国籍〉地帯、奄美大島」藤澤健一編『反復帰と反国家』社会評論社 2008年 pp.60～64。
- 53 新川明『新南島風土記』大和書房 1978年。
- 54 同上 p.239。
- 55 新川 前掲書(注番号27) p.124。
- 56 大沢正道『反国家と自由の思想』川島書店 1970年 pp.3～12。
- 57 新川 前掲論文(注番号18) p.69。
- 58 新川 前掲書(注番号17) p.306。
- 59 大沢 前掲書 p.22。
- 60 篠藤光行「アナキズム・アナルコ・サンジカリズム」『唯物史観』第8号 河出書房新社 1970年 p.96。
- 61 革命思想研究会「新左翼諸潮流の理論—現代トロツキズムとアナキズム」『月刊社会党』第149号 日本社会党機関誌局 1969年 p.68。
- 62 新川 前掲書(注番号27) p.125。なお、新川は自らを「こうみえても自分ではアナキストだと思っているから(笑)」とインタビューに答えている。新川 前掲(注番号51) p.56。
- 63 B. アンダーソンによれば、ナショナリズムが最も結合度が高く、異なる時、異なる方法でロマン主義、民主主義、理想主義、マルクス主義、アナキズム、ファシズムとでさえ結合する、という。その意味でナショ

- ナリズムとアナキズムは決して相反するものではない。  
Anderson, Benedict. *The under three flags: Anarchism and Anti-colonial Imagination*, NY; London: Verso books, 2006, p.1.
- 64 森本眞一郎「島尾敏雄の帝国と周辺—ヤポネシアの琉球弧から—」『社会文学』21号 日本社会文学会 2005年 pp.54～74。
- 65 島尾敏雄「南西の列島の事など」『島尾敏雄全集』16巻 晶文社 1982年 pp.43～44（初出は『朝日新聞』1956年1月6日）。
- 66 花田俊典「ヤポネシアのはじまり—島尾敏雄の日本地図」『日本文学』第26巻第11号 日本文学協会 1997年 pp.34～42。
- 67 仲里功「アジアという目線」読売新聞西部本社文化部編『対論「沖縄」問題とはなにか』弦書房 2007年 pp.116～118。

---

## Plotting the Space of Japan and Okinawa: The Impact of Japanese Intellectual Thought on the Anti-Reversion Debate in Okinawa

KOMATSU Hiroshi ( Research Associate, Faculty of Social Sciences, Waseda University)

The aim of this essay is to consider the impact of Japanese intellectual thought on the “anti-reversion debate” in Okinawa. The anti-reversion debate not only opposed the reversion of Okinawa to Japan, but also rejected the idea of Okinawan independence. This is because the anti-reversion debate was an ideological endeavor that refused a state model based on national identity.

The essay proceeds by analyzing two strains of thought considered to have exerted substantial influence on the anti-reversion debate: Shimao Toshio’s ‘Yaponesia’ writings, and

Japanese anarchism of the 1960s. I discuss how these influences from mainland Japan were actually received, in particular by Arakawa Akira, commonly regarded to be the central figure of the anti-reversion debate.

Finally, I show how these two ideologies influenced the anti-reversion debate, concluding that while Shimao’s Yaponesia writings provided a positive appraisal of national identity, anarchism contributed to a rejection of the state. Furthermore, I highlight the potential value of considering the anti-reversion debate in future discussions on Northeast Asia.